

京都大学言語学懇話会  
2021 年度 発表要旨

## 例会報告

### 第 114 回例会

日時・場所 2021 年 4 月 10 日 (土) 13:30-16:45 於 Zoom  
発表題目 古代エジプト語の歴史音韻論の解明に向けて  
宮川 創 (京都大学)  
エスペラントの派生動詞の興亡: -ebl-, -ind-, -ad-, 分詞  
千田 俊太郎 (京都大学)

### 第 115 回例会

日時・場所 2021 年 7 月 10 日 (土) 13:30 ~ 16:45 於 Zoom  
発表題目 最近の西夏文字研究から一字形と筆画の考察を中心に  
荒川 慎太郎 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)  
クルチウス編纂ホフマン増訂『日本文法試論』(1857 年) について  
の一考察  
Rudy Toet (長崎大学)

### 第 116 回例会

日時・場所 2021 年 12 月 11 日 (土) 13:30 ~ 16:45 於 Zoom  
発表題目 モンゴル語ハルハ方言の第二音節以下の基底開音節短母音  
— CC7VC9#について —  
角道 正佳  
中央アジア出土ソグド語文字資料の研究とその進展—ムグ山文書  
とその他の文字資料について—  
ベグマトフ・アリシエル (ベルリン・ブラン  
デンブルグ科学アカデミートルファン学セン  
ター)

## 古代エジプト語の歴史音韻論の解明に向けて

宮川 創

エジプト語は5千年以上の書記記録を持つ言語であり、文字資料によって歴史変化を最も長期間追うことができる言語である。このエジプト語を書記の面から大別すると、古代エジプト文字（ヒエログリフ、ヒエラティック、デモティック）で書かれた狭義の古代エジプト語（古・中・新・民衆文字エジプト語）と、ギリシア文字にデモティックからいくつか文字を加えたコプト文字で書かれたコプト語に分けられる。古代エジプト語が書かれた古代エジプト文字は、表音文字、表語文字、限定符に字種が分けられるが、その表音文字は基本的に子音のみであり、母音は表さない。それに対して、コプト語が書かれたコプト文字は、ギリシア文字がそうであるように、母音字を含む。古代エジプト語は、19世紀にジャン＝フランソワ・シャンポリオンによって、コプト語の知識を元に解読されたように、コプト語がその解明の鍵となってきた。コプト語の重要性は、特に、古代エジプト語の音韻論で最も顕著であり、若干の語彙の母音は楔形文字資料におけるエジプト語からの借用語からわかっているものの、古代エジプト語の母音の大部分はコプト語における同源語の母音からの推定によってでしか再建し得ない。しかしながら、コプト語（本発表はサイド方言を主に扱う）の音韻論においては、未だ解決されていない次の3つの問題がある。

- (1) 開口度中程度母音とされる母音字エータとエプシロン、オメガとオミクロンの音価差
- (2) 同じ母音字が連続して書かれる、いわゆる母音字重複の音価
- (3) スープリニアストローク（以下SS）と呼ばれる、文字の上に書かれた線の機能

(1) と (2) はコプト語の母音体系の根幹に関わる問題である。従来、コプト語文法書の多くは、エータとオメガは、それぞれエプシロンとオミクロンの長母音だと言われ、母音字重複は、その母音と声門閉鎖音を表す機能があるとしてきた。しかし、パピルス資料から、エジプトで話されていたギリシア語では、エータとオメガはエプシロンとオミクロンよりも開口度が狭い母音で、長短の差ではないことが明らかになっている。さらに、コプト文字を用い、現代でもノビーン語として母語話者がいる古ヌビア語の母音字の音価、そして、コプト語の動詞の形態変化の規則性とコプト語におけるアラビア語からの借用語の母音の表記から、エータとエプシロン、オメガとオミクロンの音価の差は、母音の長短の差ではなく、開口度の差であることを示した。そして、母音字重複については次の4点から長母音説を支持した。①古ヌビア語における母音字重複と現代ヌビア諸語の長母音が対応すること。②コプト語の動詞や名詞や前置詞の形態変化において母音字重複が母音＋声門閉鎖音を表しているとするとは変化が不規則になること。③古代エジプト語の声門閉鎖音もしくは有声咽頭摩擦音とコプト語の母音字重複が対応していない語彙が多数あること。④母音字重複が母音と声門閉鎖音を表すとする説の根拠としてきた、古代エジプト語の声門閉鎖音もしくは有声咽頭摩擦音と母音字重複との対応は、声門閉鎖音もしくは有声咽頭摩擦音がコプト語よりも以前に消失し、その前の母音が代償延長され長母音になったことで説明できること。最後の(3)のSSについては、子音の上に書かれるとその子音が成節子音を表すとする説とその子音がどの音節に属するか明示とする説がある。発表者は、発表者がゲッティンゲン大学のコプト語のコーパス開発プロジェクトで作成した、紀元後4～5世紀に生きた修道院長シェヌーテの書簡の集成の1つである『第6カノン』コーパスと写本の写真を用いて、SSの機能の分析を行った。その結果、SSは、その長さによって、機能の別がある可能性が高いことが判明した。本発表は、最後に、特にSSについてより統計学的なコーパス分析を行う必要性を述べて今後の展望とした。

(みやがわ そう)

## エスペラントの派生動詞の興亡

### -ebl-, -ind-, -ad-, 分詞

千田俊太郎

計画言語はその生ひ立ちから規範的な側面が注目されがちである。しかし、エスペラントのやうに継続的な使用実態のある計画言語の場合には、記述的な言語研究が可能であり、また言語變化を観察、分析することもできる。本発表ではエスペラントの派生動詞のうち、本来の設計から若干外れる使ひ方をされるやうになつたものを取り上げ、コーパスによりその時代的變遷を検證し、變化の動機について考察する。

接尾辭-ebl-「～することのできる」及び-ind-「～するに値する」は本来動詞語幹をとつて形容詞語幹(そしてその副詞對應形)を派生する。ところがこの派生形容詞語幹はしばしば動詞活用する。本来的な形容詞語幹の中にもしばしば動詞の語尾をとつて述語位置に立つものがあるが、この振舞は語幹によつてはさかんに行はれ、語幹によつてはあまり見られないといふ點で、語彙的である。-ebl-語幹と-ind-語幹についても動詞活用の頻度は語彙的な違ひを示すが、どちらも全體として、時代を追ふにつれ動詞活用する率が高まつてゐる。

継続を表はすものとして設計された接尾辭-ad-は、早くにその主たる機能を名詞派生とするやうになつた。初期に頻出した-ad-語幹の動詞活用は、現在では-ebl-語幹の動詞活用の使用頻度を下回るほどである。

分詞語幹はその非對稱的な振舞から能動分詞と受動分詞に分けて觀察する必要がある。能動分詞語幹は形容詞形、名詞形、副詞形で用ゐられるが、動詞活用は初期に比べれば頻度を増してゐるものの、いまだに稀である。動詞活用する際には助動詞やコンピュータ動詞の過去能動分詞接續法(-int-us)に大きく偏つて出現する。受動分詞は形容詞形の使用が壓倒的に多い。ここでも動詞活用は見られるやうになつてきてゐるが稀であり、いくつかの語彙の現在受動分詞直説法現在(-at-as)が若干目立つ程度である。

言語變化の方向を探ると、これらの變化の傾向には、設計上の、あるいは初期の使用慣習におけるスラブ的性格からの脱却と位置付けられさうな場合が多い。また、これらの變化の動機には、いくつかの機能的な要因も認められるやうである。

(ちだ しゅんたらう)

## 最近の西夏文字研究から —字形と筆画の考察を中心に—

荒川 慎太郎

発表者が近年取り組んでいる、「西夏文字の字形、特に筆画」の研究におけるいくつかのトピックを報告した。

はじめに西夏語と西夏文字について概略を述べた。西夏文字はいわゆる「疑似漢字」の一つとして知られるものの、成立の経緯や文字の形状、資料の特性など、ユニークな点が多い。特に西夏時代（11～13 世紀）に韻書（発音字典）が何種も編纂され、当時の字形分析が存在することも述べた。

続いて、本邦における西夏文字研究のパイオニア、故西田龍雄博士の西夏文字研究について、年代的に 3 期に分類し、各時代の論考の特徴などを述べた。それに加えて、博士による西夏文字研究の端緒となった、『西夏國書字典音同』の、国内における所蔵経緯、ロシアに所蔵される原書『同音』の構成などを解説した。

『同音』などの西夏文字原文資料から西夏文字の字形と筆画を再考するという、報告者による近年の研究について、1. 「ノメメ」型「5 画」部首再考、2. 西夏文字の点の機能、から述べた。前者は、従来カタカナの「ノメメ」のような筆画を組み合わせた一種とされていた部首が、実は「ノメメ」型「飛」部、「くくノ」型「大」部、「くノメ」型「招」部の 3 種で、実は画数も意味も異なる要素であることを述べた。後者は、西夏文字の「点」が、判読・弁別の難しい筆画（ヒのような文字要素の、斜め払いが縦棒を突き出るかどうかなど）を注意するために付された記号として機能したことを示した。補足として、「新造」字に関する直近の研究から、西夏文字は創製当初から、西夏語のほとんどの語彙を網羅する字形が用意されており、新造の事例が極めて少ないことを述べた。

原文を子細に分析すると、西夏文字には従来考えられていた以上に微細な筆画の弁別点があり、漢字の筆画・運筆に囚われずに観察する必要がある。筆画の再検討により、西夏文字の部首の意符・音符としての機能が判明することが、今後も期待出来る。

（あらかわ しんたろう）

## クルチウス編纂ホフマン増訂『日本文法試論』についての

### 一考察

Rudy TOET

幕末の出島オランダ商館長兼駐日オランダ領事官のドンケル・クルチウス (Jan Hendrik DONKER CURTIUS, 1813–1879) が編纂し、オランダ領東インド政府翻訳官兼ライデン大学日本語・中国語教授のホフマン (Johann Joseph HOFFMANN, 1805–1878) が増訂出版した『日本文法試論』 (*Proeve eener Japansche Spraakkunst*, Leiden: A.W. Sijthoff, 1857) は、オランダ語で書かれた日本語文典である。標題紙には、オランダの植民地大臣が出版を命じ、ホフマンが原稿を「解説および訂正し、広範な補足により増補した」とある。読み進めると、現地で日常的に日本人と接しているが学者ではないクルチウスと、まだ日本人に会ったことすらないが日本語の文語に精通している専門家のホフマンとの衝突、ひいては長崎方言の特徴が見られる口語と保守的な文語との衝突が目前で繰り広げられる。

『日本文法試論』は、日本語学史においてホフマンの『日本語文典』 (*Japansche Spraakleer*, Leiden: A.W. Sijthoff, 1867–1868) の前触れとして位置づけられ、幕末の長崎方言の資料としての価値も指摘されているが、ホフマン執筆の序文の誤訳や関連資料の未確認により成立経緯が正しく理解されていない部分も残っている。本発表では、ライデン大学附属図書館所蔵の『日本文法試論』の原稿とホフマン旧蔵書き入れ本、ならびにオランダ国立文書館所蔵の在日オランダ商館文書と植民地省文書の調査結果に基づいて、『日本文法試論』の原稿の成立経緯とその背景を再検討した。西洋大国に対して開国しつつあった日本との有利な関係を維持し発展させようとする小国オランダの政策の一環として、オランダ人と日本人の間の意思疎通の補助資料の提供および日本におけるオランダ語の普及が出版の狙いであったと指摘した後、オランダ通詞よりも出島で雇われていた召使が原稿の編纂に直接関与したことの根拠を示し、クルチウスが 1810 年に中津藩主の命で出版された和蘭辞典『蘭語訳撰』をも活用した可能性に触れた。さらに、商館文書の中に、当時の海軍伝習生勝海舟 (麟太郎、義邦、安芳、1823–1899) が原稿の内容についてオランダ語で記した 49 頁のメモを見つけたと報告した。

(るでい と一と)

## モンゴル語ハルハ方言の第二音節以下の基底開音節短母音 —CC<sup>7</sup>VC<sup>9</sup>#について—

角道 正佳

モンゴル語ハルハ方言における第二音節以下の短母音の位置は、基底に指定しておかなくても予測可能であることが角道 (1974)、Svantesson (1994, 1995) 及び最適性理論を用いた Harada (1999) で論じられているが、先行研究では正しく予測できないか例外扱いされている有標の音連続 CC<sup>7</sup>VC<sup>9</sup># が存在する。逆引き辞典で検索するとこの有標の音連続は 128 語あり、一方先行研究で説明できる無標の CVC<sup>7</sup>C<sup>9</sup># は 762 語ある。有標の音連続の一部は語構成の面あるいは流音+両唇音+s の連続を流音+両唇音+母音+s に遮断する規則を一般の母音挿入規則に先行させることで正しく予測できるようになる。この処理は rule based の方法では可能であるが最適性理論では困難である。いずれにしても最終的には基底に指定しておかざるを得ない短母音が存在する。この現象をモンゴル文語の音節構造と現代語の音節構造を比較する方法で通時的観点から見ると、規則性が少しははっきりするが、音韻的にすべてを説明することはできない。

Harada, Ryuji (1999) 'Syllabification in Khalkha Mongolian and output-output correspondence,' *Phonology at Santa Cruz*, Vol. 6, pp. 13-24./角道正佳 (1974) 「ハルハ方言の正書法」『日本モンゴル学会会報』第 5 号 pp. 26-36./Svantesson, Jan-Olof (1994) 'Mongolian Syllable Structure,' *Working Papers 42*, Lund University, Dept. of Linguistics, pp. 225-239./Svantesson, Jan-Olof (1995) 'Cyclic syllabification in Mongolian,' *Natural Language and Linguistic Theory* 13, pp. 755-766.

(かくどう まさよし)

## 中央アジア出土ソグド語文字資料の研究とその進展

### —ムグ山文書とその他の文字資料について—

ベグマトフ アリシエル

本発表では、ムグ山文書に見られる2つの言語特徴である関係代名詞と直示動詞について扱う。また、ムグ山文書の内A-1とB-4の2つの経済文書の新たな解釈を提案する。

8世紀に中央アジアがアラブ勢力によって征服された際、ソグド王デヴァシュティーチは現タジキスタン北部に位置するムグ山に逃れ、そこで城砦を建てたとされる。その城砦跡と推定される遺跡からは1930年代に80点近くの文書が見つかっている。これらの文書は一般に「ムグ山文書」と知られ、その殆どがソグド語であるが、その他にアラビア語のものが1点、テュルク語（ルーン文字）のものが1点、漢文のものが3点確認されている。

これらの文書は、Livshits (1962; 2008)とBogolyubov&Smirnova (1963)によってすでに解読されているが、把握されていない言語特徴があり、組織的に見直す必要がある。また、他のソグド語資料には確認されない単語も少なからず含まれており、ソグド語の知識だけでは解読が難しいという問題がある。それらの単語を理解するためにはソグド語以外の中央アジアの諸言語（主にイランやテュルク系）を参照しなくてはならない。

ムグ山文書の言語特徴としては、ソグド語の関係代名詞は*ky*と*cw*であるが、*cw*関係代名詞以外にもいくつかの機能を持つことについて考察を行う。また、ソグド語には $\beta yr$ 、 $'s$ 「もらう、取る」、 $\delta br$ 「あげる」、 $'br$ 「持ってくる」という動詞の存在が知られている。ムグ文書、殊に経済関係の文書においては、これらの動詞は頻繁に使用されている。これらの動詞は先行研究では機能や用法について十分に解明されていない。本発表では、これらの動詞と、ともに現れる冠詞、前・後置詞、副詞の間に一貫性（規則性）があることを提示する。

ムグ文書の経済文書で扱われる品物の種類は、主に織物、革製品、武器・装甲、家畜、穀物、食・飲料、宝石、金銭などに関わる内容である。筆者のこれまでの研究により、先行研究などで把握されているよりも織物や革製品関係の品物が多いことが判明しつつある。織物や革製品に言及する文書はA-1, B-1, B-4, B-20である。これらの文書は先行研究によって全体的に誤って解読されていると推定される。特に、文書のA-1, B-4, B-20に現れる単語は宝石類や鎧・武器などと解釈されているが、誤りであると推定される。

本発表で扱うA-1とB-4とラベル付された文書に関しては、先行研究において、その中に出てくる品物名は、宝石類や武器・装甲を意味すると解釈されてきた。しかし、現存するイラン諸語やテュルク諸語、そしてチベット語の織物に関係する単語と比較をしてみると、A-1とB-4は織物や革製品に関することを記した文書であると推定される。（ベグマトフ アリシエル）